

読解演習

解答

問一 私の台所ぶっおなじこと

問二 鍋釜や瀬戸ものへの当りのおだやかさ・動きまわる気配のおとなしさ

問三 厚味のある優しさ

問四 〇京都を話題にした人たちは、旅行者として訪れていたため、台所の音を聞く機会がなかったから。

問五 エ

問六 (1) 十一月・夕食・ひそりとした小路

(2) 静か・早間

(3) 自分がいまうけることか

問七 イ
問八 ウ

解説

問一 父が「ただした」目的は、「私の台所ぶり」の欠点を指摘し、叱ることだったと、「私」は捉えている。

問二 「代々うけ継いできた女のやさしさ」とは、京都のおんなのひとが台所での振る舞いを通して示すやさしさを指すので、その振る舞いが具体的に書かれた部分を探す。二つの事柄が列挙された部分を押さえる。

問三 これは第二段落に「これは決して付焼刃や、一代こつきりその人だけという底の浅いやさしさではないと思う。女代代伝えてきた、厚味のある優しさがかがえるものだ」を受けた表現。「一代こつきり」でなく「代代」という伝統の重なりを、「父」は「厚味のある」という言葉で表している。

問四 第四段落からまとめる。ポイントは「旅」「京都のおんなのひとの好もしさ」を話題にした人は、「みな東京からの旅行者だった」と「私」は気づいた。旅行者であれば「厨房は遠い感じになる傾き」があり、京都の台所の音を聞く機会は得にくい。だから、台所の音は話題にならなかったのである。解答は、「京都を話題にした人たちが」「旅行者（旅の人）」だったことと、そのため「台所の音」に近づく機会がなかったことを押さえ、「くから。」などで終わるようにまとめる。

問五 「浮いてくる」結果、「暴れようとする気持がすばまってしまふ」とあり、それを「侘しさ」と感じているのだから、京都の音を思うと暴れられない、つまり暴れなくなったのを反省する心情が読み取れる。合うのはエ。

問六 (1) 「私」が自分で「京都の台所の音」を聞く体験ができたことは、第五段落につづられている。そこから、「時」と「場所」を表す言葉を探して答える。「夕食」前だったから「台所の音」を聞けたのである。

(2) 第五段落の京都の音についての表現は「ものをきる音、水の音、そしてそれから器のふれる静かな音」静かではあるが私の想像していたものより、はるかに間拍子の早い音「父もきけば音の刻みを、その時より早間だというだろう」「決して疳高くはないひびき」の四箇所にある。「疳高くはない」は「静か」と同要素、「間拍子の早い」も「早間」と同じ。なので「静か」「早間」が答え。

(3) 第五段落の末文に「くらべくらべ」とある。この文から、自分の台所の音について述べた部分を押さえる。

問七 生前の父が言った京都の台所の音に関することばは、「私」の心に強く残り、「ながく大事にしまっておいた」が、第五段落の夜、実際に聞くことで意識の表面に出、今の自分の音を反省するものとなった。これに合うのはイだけ。

問八 京都の音とくらべ、「私」は今でも自分が「疳高い音を打ちつける」ことを反省している。これは、ウの不快な音を立てたくないという考えに結びつく。イとエはその考えに反するので選べない。アは、音を立てるのは「生きている証拠」とする最後の段落に合わないのではあり除外である。

重要語句

① だらだら坂……なだらかに続く長い坂。

例文 ↓ だらだら坂を上ったところに見晴らしの良い公園がある。

② ただす……(1) 正しい様子に改める。(2) 追求する。質問して確かめる。本文中では

(2) の意味で用いられている。

例文 ↓ (1) 式が始まる時刻となり、列席者たちが姿勢をただす。

(2) 教師が、自由という言葉の意味を生徒にただす。

③ 付焼刃……一時の間に合わせのために急に覚えること。

例文 ↓ 大任を果たすには、付焼刃の知識では対応しきれない。